

の畫風を慕ひ、別に一家を成したる故鶴田機水氏の爲めに、氏の知友たりし知名諸氏數十名相謀り、五月十六日より二十日まで、上野公園松坂屋吳服店に於て、故人の遺墨展覽會を開き、猶追善畫會を開きて、知名畫家の畫幅百餘點を陳列して即賣に附し、其収入は總て遺族に贈呈する筈なり。

大正五年十二月には『鶴田機水遺墨帖』（松浦一編集発行）が発行された。

#### ⑦ 神木（森井）健介起用

大正三年六月二日、大沢三之助（同年八月十二日宮内技師に転任）の後任として神木健介が教授に任命された。神木は旧姓森井。神木と改姓し（大正二年）、再び森井姓に戻った（同十二年）。彼は明治四十四年東京帝国大学工科大学建築科を卒業し、大正二年欧米留学。翌三年六月帰国し、本校に起用され、昭和十九年に退官するまで本校建築科の教育に尽力した。

#### ⑧ 小万柳堂鑑藏書畫展覽會

本展覽會については年報もこれに触れているが（前頁）、『東京美術学校校友会月報』第十三卷第三号には非常に詳しい記事があるので左に抜粋する。

#### 小萬柳堂鑑藏書畫展覽會

去る六月六日及び七日の兩日、本校文庫を會場として、支那の藏

幅家廉泉氏所藏書畫の展覽會を開きたり。廉泉氏は上海に近き江蘇省常州無錫の人にして、曾て江蘇舉人として中央政府の官吏となり、陞りて位二品官度支部郎中に至りしが、歳不惑に達すると共に、掛冠して故山に退耕し、専ら思を刊書著作藝術に潛めらる。別業を小萬柳堂と號し、鑒藏の古書畫悉く之れに收藏せりと云ふ。廉氏聚珍の内容は、古書古畫を始め、銅器磁器玉類等各般の器玩に互り、古畫のみにても一千五百六十點の多數にして、唐宋以來の名蹟は、概ね備はらざるなく、殊に明清諸家に至りては、悉く蒐羅して漏すなしと、而してこの大聚集の一半は、廉氏祖先以來累代積聚したるものにして、他の一半は明末の豪族宮紫玄、及び其子孫相傳へて聚珍に意を用ひ、宮子行宮玉甫兄弟に至りて、前後四十五年間數十萬金を費し、支那十五省を歴遊して廣く搜求し、扇面のみにても千有餘面を得たるものなりといふ。

〔中略。端方著「廉氏小萬柳堂藏畫記」〕

北京駐劄の山座公使、廉氏收藏の豊富なるを聞き、廉君を憐憑して帶同來朝せしめたるを以て、本校に於ては展覽會を開き、本邦藝術界の研究資料に供することとし、廉氏所携の珍什を悉く文庫に於て保管し、文庫閱覽室及び陳列室を會場に充て、左の趣意書を添へて普く朝野藝能の士を、招待したるが、兩日の來觀者凡そ一千五百名の多數に上り、松方侯、徳川（義親）侯、土方伯、平田子、秋元子、末松子、花房子、後藤男、高橋男、牧野男、九鬼男、都築男、近藤男、細川潤次郎男、股野博物館長、矢野龍溪、鎌田慶應義塾長、小牧昌業、下條正雄、田中文學博士、犬養毅、前田文學博士、山本前農相、市村博士、箕作博士等社會各方面の

愛好者諸氏を網羅し非常の盛會なりき。

今回東京美術學校に於て展觀する中華民國廉泉氏所藏の書畫は、彼地に於て頗る有名なるものにて、先年獨逸の皇太子、支那に觀光の豫定ありし頃、清國政府にては支那の美術を代表するに足るべき名畫を展觀に供せむとし、種々訪選の結果廉氏の藏品を借入れしが、流行病の爲に觀光見合せと爲りし爲、その儘一時北京に在りしに、生憎革命の變亂ありしかど、廉氏は保管を外國人に托して、安全なる事を得今回大正博覽會に際し、山座公使等よりその尤品を携へて我國の同好者に示すことを懇憑せられ、行篋に收め來りしもの約百點あり。同氏の藏品は、明末の名士宮紫玄が、その春雨草堂に王建章、張瑞圖、倪元璐等と詩畫に耽遊せし時の遺品多く、姻戚の關係を以て、後に宮氏より傳はりしものを主とし、就中王建章の扇畫の如きは廿四面盡く非常の傑作たり。その餘元季以來の書畫に未だ本邦に流傳せざりしもの少からず。又南唐刻本澄清堂帖の如きは明代僅かに三本を存せりと云ふものゝ一にして即ち邢子愿の舊藏本なれば、實に天下の逸品なり。文雅の士鑒賞の機を逸する勿かれ。

〔下略〕

廉泉は本校の尽力に対し、謝礼として王建章筆廬山觀瀑図大軸に自筆題記を添えて本校に寄贈した。また、本校は出陳作の中から三十余点を選び、これに大村西崖の解説を附した『小万柳堂劇蹟』を大正三年七月に審美書院から発行した。なお、上記月報および次号

の第四号には王建章、仇英、沈石田、王孟端、傅山、張船山、高鳳翰、石濤、周之冕、倪元璐、唐履雪の作の写真が掲載されている。

#### ⑨ 日本美術院再興、第一回院展

大正二年九月二日の岡倉天心死去を契機に横山大観、下村観山、木村武山ら弟子たちの間に日本美術院再興の議が起こり、これに辰沢延次郎、笹川臨風、齋藤隆三らが協賛し、急拠計画が進められ、大正三年には美術院に縁故の深い谷中の地に研究所が建てられた。本館は二階建疊敷數百二十余坪の純日本式建物で、これに二十余坪の別棟と十坪の管理人室が連なり、本館二階二十五疊の室が同人の画室に、階下五十疊が研究室に、五間に三間の板の間が洋画研究室に、十五疊が図書室に、また、別棟は木彫研究室、塑造研究室にあてられた。

洋画研究室が設けられたのは、大観と小杉未醒が以前から計画していた自由研究所構想によるもので、ここでは未醒が制作や指導を行うこととなった。木彫研究室は平柳田中が中心となって使用した。第一回文展開催のとき、岡倉天心の提唱により高村光雲、米原雲海、山崎朝雲、滝沢天友、平柳田中らが日本固有の木彫美術の振興を目的とする日本彫刻会を結成したが、田中は院再興を機に日本彫刻会を開散し、吉田白嶺、内藤伸、下村清時、佐藤朝山を伴って美術院に参加したのであった。

大観らは、最初は単に天心の遺志を継いで真摯に日本画を研究し、日本画の向上を図ろうという趣旨で計画を進めたが、そのさなかに大観が文展の審査委員を除外されるということが起こった。文